

ずいそう

## 熊谷組での常勤産業医としての5年間

清本 芳史



「母校で初の建設業の常勤産業医になってみないか?」。副学長から突然の電話。予定にない未来がやってきて、今では過去になった。

母校の産業医科大学(福岡県北九州市)は産業医(仕事と健康問題に精通した社員のホームドクター)を養成する日本で唯一の大学だ。私は2003年に大学を卒業後、研修医として2年、製造業の産業医として1年、母校で研究者として2年、厚生労働省労働衛生課で医師の役人として2年従事していた。

厚生労働省に在任中の2008～2009年度当時、霞ヶ関の中央省庁は「天下り」、「居酒屋タクシー」等、何かと世間に批判されることが多かった。また、「役人」、「官僚」とひとくくりで呼ばれ、無機質なイメージがあった(今でもそうかもしれないが…)。だが、実際にその中に飛び込んでみると「国を思い熱いハートを持った人間たち」が深夜の終電間際まで、時には夜通しで働き、この国が世界の変化に呼応し機能不全にならないよう頑張っていた。私もその一員として自身の将来など考える余裕もなく、朝から晩まで働いていた。そんな中で思いもよらず人生を左右する電話が鳴った。

産業医を常勤(専属)で雇う企業は限られている。一つの事業場に1,000人以上の社員を抱えていなければ、法律上雇う必要がないからだ。熊谷組の場合、本社が400人、首都圏支店が700人程度とそれぞれ1,000人に満たず、産業医は非常勤(嘱託)でも法遵守上は事足りた。それでも、社内の健康管理を実態として進めるために、「通常の社員よりはるかに給与が高い30歳そこそこの医師」である私を雇う決断をしてくれた。その思いに応えたくて、建設業に身を委ねることにした。

熊谷組に入社した2010年度以降、「健康が働く上での最大の資本であり武器であること」、「仕事で心身の健康を損なわないよう対策を進めることの大切さ」(＝健康意識の向上＋企業責任の履行→企業価値の増大)をいかに浸透させるかに悩み、もがいた。この間、様々

な健康施策(①健康診断結果の不良者への個別アプローチ、②長時間労働者のチェックリストの回答確認・対応、③心身の不調者の復職等支援、④建設現場や福島原発の視察・社員面談、⑤安全衛生委員会の出席・講話、⑥メンタルヘルス等の健康教育、⑦健康メルマガの配信、⑧卒煙社員の紹介、⑨チーム制仮想ウォークラリーや体力測定会の実施、⑩屋内禁煙・喫煙室の縮小化等)に取り組んだ。当然私一人でするものではなく、保健師・人事総務部・安全部等をはじめ多くの方々の協力や理解があった。「一人ひとりの力は微力でも、同じ方向に向いて力を合わせれば大きなこともできる」という“ものづくりの根底”を経験させてもらった。

建設業は役所とどこか似ている。世間からは「談合」等の負のレッテルを貼られ、バブル崩壊後の財務体質の悪化や建設投資の減少に伴う厳しい受注競争等によって、薄利で給与も決して高くない。きつい・汚い・危険は相変わらずで、高齢化と人手不足は深刻化している。そんな疲弊した中でも業界の未来のため、社会保険の未加入問題の是正や土曜の隔週休み等に向けて自主的に取り組みを進めている。また、発注者の影となり、社会インフラを整備し、震災の復興を担い、人々の生活を支えている。「アピール下手で寡黙に社会に貢献し続ける業界」、今ではそう思う。

「建設業の産業医として何が求められているのか?」、「熊谷組に対して何ができるのか?」を自問し続け、この5年間歩んできたが、退職にあたって「母校の後輩を後任として雇ってもらえること」になり、進んできた道は概ね間違っていなかったのかなと感じている。

終わりは始まりでもある。お世話になった熊谷組への恩返しは、新天地でも頑張ることだ。仕事はもちろん、趣味のランニングでも再び100kmの日本代表になって世界と戦いたい。

—きよもと よしふみ (株)DeNA 統括産業医—

